

| | |
|--------------------|--|
| 会議名 | 第 145 回日本獣医学会 学術集会 |
| 開催日時 | 平成 20 年 3 月 28 ~ 30 日 |
| 開催場所 | 麻布大学キャンパス (神奈川県相模原市) |
| 主催者 | (社)日本獣医学会 (大会長: 麻布大学獣医学部長 有嶋和義) |
| 参加人数(概数) | 約 1,500 名 (主として大学、研究機関の研究者等) |
| 1. 会議の概要 (資料添付) | <p>本学会学術集会は年 2 回開催されており、今回は 9 会場を使用し 3 日間にわたって行われた。その概要は以下のとおりである。</p> <p>1. シンポジウムによる発表課題数は野生動物 11、獣医解剖 6、獣医病理 13、獣医寄生虫 4、微生物 20、家禽疾病 4 課題、公衆衛生 4、獣医繁殖 10、臨床 13、生理・生化学 9、比較薬理 6、実験動物 5、競走馬 5 であった。また、ポスターによる発表課題数は獣医解剖 39、獣医病理 33、獣医寄生虫 28、微生物 41、家禽疾病 6、公衆衛生 21、獣医繁殖 8、臨床 35、生理・生化学 15、比較薬理 22、実験動物 5 であった。</p> <p>以上のように、発表課題の内容は多様な分野に及ぶが、家畜衛生分野としては疾病の診断・治療・予防のほか、新興・再興感染症、人獣共通感染症、安全性確保などが行われた。たとえば、生産現場で話題となっている粘膜投与型ワクチンやサイトカイン療法の実用化研究、高病原性鳥インフルエンザや牛海綿状脳症 (BSE) の病理発生の解明、豚サーコウイルス病ワクチンの臨床評価などの研究発表も数多くあった。</p> <p>2. 講演は招待講演、記念講演などを含め計 9 話が行われた。なかでも、金澤一郎氏(日本学術会議会長)による「科学者の行動規範」と題する講演は多くの聴衆を集め、実験の捏造、論文盗用などの不正行為が発生する背景について考察し、その源は科学者としての不適切な価値観に帰着する 경우가多く、その防止には科学者の自律性を高めることが何より重要なことと訴えた。市民公開講座は 4 話が行われ、今回は主として愛玩動物が取り上げられたが、その内容は一般市民にとってはやや難解と思われた。</p> <p>3. プレナリーセッションでは、研究成果 9 課題の発表が行われたが、いずれも病原体や病理発生に関する基礎的研究であった。以下はその発表課題名である(サブタイトルは省略した)。</p> <p><i>Theileria parva</i> 感染によるリンパ球“腫瘍化”分子機構の解明、トキソプラズマ原虫におけるカルシウム依存的分泌タンパク質の網羅的同定および動態解析、イヌのリンパ腫における微小残存病変(Minimal Residual Disease:MRD)の検討、肥満のイヌにおけるレプチン抵抗性の病態に関する研究、学習記憶の異なるモデルラット(Hatano rat)を用いたストレス制御に関する内分泌学的解析、炎症性腸炎疾患における腸管神経系の機能変化に対する腸管グリアの関与、乳房炎発症とウシ主要組織適合遺伝子(BoLA)クラス、ラットにおける CYP2D、2D3 依存の薬物代謝酵素活性の系統差及び個体差、ウマヘルペスウイルス 型神経病原性の <i>in vivo</i>、<i>in vitro</i> 解析</p> |

| | |
|--|--|
| <p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題</p> | <p>1. 粘膜投与型ワクチンの開発研究 「粘膜投与型ワクチンの最近の話題」のテーマでシンポジウムが行われた。動物用ワクチンは注射型のものがほとんどで、接種時に過大な労力を要し、事故やストレス負荷のリスクがある。これに対して非侵襲型ワクチンは、経口、点眼、噴霧（経鼻）等の粘膜投与ルートなので、省力的でありストレス負荷も少ない利点がある。本シンポジウムでは、以下の研究課題が発表された。 粘膜免疫を基礎とした次世代ワクチン開発へ（浅野 宏：東大）、 寄生虫感染症における粘膜免疫法に試み（松本安喜：東大）、 経鼻粘膜投与型インフルエンザワクチンの開発（長谷川秀樹：感染研）、 乳酸菌を宿主とした組換え経口不活化ワクチンの豚における有効性（長尾和哉ら：化血研）、 アユ冷水病ワクチン開発の現状と課題（乙竹 充：養殖研）</p> <p>2. 食中毒対応型ワクチンの開発研究 シンポジウム「最近の鶏病ワクチン開発と今後の展開」では、中村成幸（動薬検）は“鶏病ワクチンの過去・現在・未来”と題して、既承認の鶏用サルモネラ（SE、ST など）や牛用大腸菌 O 157 などの保菌防止のための食中毒対応型ワクチン開発の重要性を指摘し、カンピロバクター保菌防止のためのワクチン開発を急ぐべきと主張した。</p> <p>3. 豚サーコウイルス病ワクチンの野外治験 現在、肉豚生産に甚大な被害を与えている豚サーコウイルス病に対する不活化ワクチンの臨床試験成績に関して、以下の課題がポスター発表され、その有効性が確認された。 豚サーコウイルス 2 型感染症（油性アジュバンド加）不活加ワクチン「ポーリシス PCV」野外における安全性と有効性（佐藤憲一ら：インターベット）、 豚サーコウイルス 2 型（PC2）感染症（油性アジュバンド加）不活加ワクチンサーコバック臨床試験（小野恵理子ら：メリアル）、その他に関連 2 課題が発表された。</p> |
| <p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p> | <p>1. 危機管理型家畜伝染病発生地図表示システムの開発（小泉信夫ら：動衛研）および地理情報システム（GIS）を用いた北海道における BSE 発生に関するリスク要因の研究（門平睦代ら：帯畜産大）は、効率的な防疫体制の構築や発生予察や原因解明に有効知見と思われる。</p> <p>2. Ochratoxin A に対するモノクローナル抗体およびその特性（広田次郎ら：動衛研）は、飼料中のオクラトキシンをエライザ法により安価かつ簡便に検出する研究であり、今後、普及技術として確立する必要がある。</p> |
| <p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p> | <p>近年、農場段階における安全性確保が強く求められるようになっており、今後、この面での家畜生産技術に係る開発課題が多くなると予想される。さらに、薬剤の使用規制が強化される中、ワクチン開発に対する要請は一層高まってこよう。しかし、ワクチンの製品化に結びつくには多くの基礎的研究の蓄積が必要と思われるので、研究開発課題の採択に当たっては、この面での評価も重要と思われる。</p> |
| <p>5. 会議の所感</p> | <p>1. 日本獣医学会学術集会は規模が大きくなりすぎた感があり、種々の発表が同時進行するので、興味のある研究課題の発表が聞けない不便さがあった。</p> <p>2. 連携学術集会の構成会員は大学、国公立研究機関の研究者、獣医療に従事する獣医師等である。発表課題を聞く限り、基礎研究の発表が大半を占めているが、種々の分野との情報交換の場の提供という観点からも極めて有意義である。</p> |
| <p>報告者</p> | <p>柏崎 守</p> |